親子二人三脚による工業立国の理想のために

5 竹内 綱と明太郎

江戸末期に土佐藩士族の家柄に生まれ、明治維新の乱世を生き抜いた父・竹内 綱と長男・竹内明太郎。新しい日本をどのような国にしたいと考えたのでしょうか。国のために自らが何をするべきか、という想いが常に念頭にあった父子の生涯を振り返り、彼らが理想としていた国家について考えてみましょう。

父・竹内 綱

竹内 綱（1839-1922）
写真提供：宿毛市立宿毛歴史館

竹内綱は天保10（1840）年土佐藩家老・伊賀氏（宿毛山内氏）の家臣・竹内庄右衛門吉管の子として土佐国宿毛（現高知県宿毛市）に生まれました。23歳で目付役として大坂に宿毛蔵屋敷を建てるなど主家の財政再建に尽力し、若くして実業家としての才能を発揮しました。

明治に入ってから後藤象二郎の引き立てにより大阪府少参事や大蔵省六等出仕をつとめます。明治7（1874）年、後藤から蓬莱社の高島炭鉱の経営を任され鉱山開発を行います。しかし明治14（1881）年、蓬莱社は多額の負債を背負い、これらの炭鉱を三菱の岩崎弥太郎にやむなく譲渡します。その後、新たに明治18（1885）年、佐賀県東松浦郡北波多村（現唐津市）に芳谷炭坑を開鉱します。政治家としては、明治14（1881）年、板垣退助を総理とする自由党が結成され竹内も参加します。明治15（1882）年、板垣が岐阜で暴漢に襲われ「板垣死すとも自由は死せず」という名文句を吐いた時、彼を抱きかかえたのは綱でした。

広がりつつあった自由民権運動に危機感を抱いた第1次伊藤内閣は、明治20（1887）年12月25日に保安条例を公布し、竹内はこの適用を受け東京から3年間の退去を命ぜられます。このとき彼が身を寄せたのが横浜太田町（現在の横浜市中区）の吉田健三邸でした。綱は貿易商で実業家の吉田健三と親交が厚く、後に内閣総理大臣を務めた五男・茂を吉田家へ養子に出しています。

帝国議会が成立することとなり、綱も明治23（1890）年に第1回衆議院議員総選挙に立候補して当選し、自由党土佐派を率いました。しかし、在職はわずかに1期で、次期選挙には再出馬を断っています。一方で、明治25（1892）年の第2次伊藤内閣誕生とともに、伊藤博文首相・板垣退助を説いて政府と議会多数派の自由党との連携を策しています。

綱は実業家としても多くの実績を残しました。明治29（1896）年、渋沢栄一らと共に京釜鉄道の発起人となり、設立後常務取締役を務め、明治36（1903）年京仁鉄道を京釜鉄道に合併させております。身近なところでは常総鉄道（現 関東鉄道）の初代社長を務めました。なお、芳谷炭坑を始め各地で手がけた鉱山業は長男明太郎に受け継がれます。（18ページ「竹内鉱業」をご覧ください。）

子・竹内明太郎

竹内明太郎は万延元（1860）年、土佐・宿毛、伊賀家の藩士竹内綱の長男として生まれます。幼少期は酒井南嶺の「日新館」で学びました。10歳のとき父の仕事の関係で郷里を離れ、14歳で父親と共に上京し、土佐出身の思想家、中江兆民の「仏学塾」に通うように

なります。明太郎の思想形成において、東洋のルソーと称され、フランス流自由民権論を唱える自由民権運動の理論的指導者の兆民から受けた影響はとても大きなものでした。

明治 18（1885）年 26 歳の時、綱が創業した芳谷炭坑の経営に加わり、政治活動や鉄道事業が多忙な父親に代わって会社の実質的な経営者となります。

明治 27（1894）年、東京に竹内鉱業株式会社を設立し、事業の全国展開を試みます。明治 35（1902）年、竹内鉱業は遊泉寺銅山（石川県小松市）を取得し、近代的な採掘方法で飛躍的な発展を遂げます。

明太郎は明治 44（1911）年芳谷炭坑を売却しますが、その年竹内鉱業傘下で綱が運営する茨城無煙炭鉱株式会社の社長に就任しその炭区を拡張します。竹内鉱業はそのほか新潟県糸魚川の橋立金山、北海道の大夕張炭鉱など全国に優良鉱山をもつ、屈指の鉱山会社に成長させます。こうして竹内鉱業は三井や三菱と肩を並べるほどの大企業になりましたが、明太郎の思いは、そうした事業拡大とは別の方向に向いていました。

明治 33（1900）年、パリ万博を見学したとき、欧州諸国の驚くべき工業力に圧倒され、国を豊かにするためには、何よりも工業の発展が急務であると考えます。工業立国を適（かな）えるために、唐津に工科学校の創立を計画し、多くの優秀な研究者を海外に留学させました。時を同じく大隈重信は早稲田大学に理工科の創設を悲願としていましたが、財政面と人材面で難航していました。これを知った明太郎は国の工業発展を第一と考え、それまで育成した研究者を大隈の早稲田大学に惜しみなく譲りました。さらに 20,970 円にも及ぶ多額の財政支援をしました。こうして明治 41（1908）年、早稲田大学理工科（現在の基幹理工学部・創造理工学部・先進理工学部）の創設が実現したのです。大隈は後々まで明太郎に感謝し、「無名の英雄」と称えました。

早稲田大学では大正 13（1924）年、明太郎に「校賓」の名称を贈呈し、平成 5（1993）年に「竹内記念ラウンジ」（55 号館）を、平成 20（2008）年に「竹内明太郎　記念会議室」（63 号館）を設置、平成 23（2011）年には「竹内明太郎之胸像」をコマツの支援で西早稲田キャンパス西門付近に設置し、理工学部「最大の恩人」と称（たた）えています。

竹内明太郎（1860-1928）
写真提供：宿毛市立宿毛歴史館

また、綱から受け継いだ「工業冨國基」の理念に基づき明治 45（1912）年、私財を投じて郷里の高知県に私立高知工業学校（現高知県立高松工業高校）を創立しました。全国初の 5 ヵ年制、完全にオリジナルなカリキュラムを組む優れた工業学校となり、優秀な人材を多く輩出しています。

明太郎は鉱山経営を行う一方で、埋蔵資源に頼らない地場産業の必要性を唱（とな）えます。いくら優良な鉱山、炭鉱であっても埋蔵資源は限りがあり、いつかは枯渇（こかつ）すると考えたからです。特に機械工業の必要性を感じ、明治 42（1909）年、芳谷炭坑内に唐津鐵工所を創業します。唐津鐵工所は大正 5（1916）年竹内鉱業から分離独立し株式会社唐津鐵工所となります。現在は株式会社唐津プレシジョンと社名を変えています。

明治 44（1911）年、若き技術者、橋本増治郎の国産車製造に対する熱い思いに応えた形で、快進社（現日産自動車）の創業を支援し、国産車第一号となるダット号の開発に尽くします。ダットサンの DAT は支援者である田（でん）健治郎（D）、青山禄郎（A）、竹内明太郎（T）の頭文字をとったものです。快進社の初代社長は橋本増治郎が務めますが、所在地が当時外交官で弟の吉田茂邸内（広尾）及び竹内鉱業本社内に事務所を置いたことから、明太郎は支援者というよりも、社長に準ずるポジションであったと想像出来ます。現在も日産自動車の海外ブランドとして「DATSUN」が残されています。

明太郎は唐津に唐津鐵工所を創業したように、大正6（1917）年、遊泉寺銅山内に小松鉄工所及びその翌年、小松電気製鋼所を竹内鉱業の付属施設として創業させます。小松鉄工所の初代所長に快進社社長の橋本増治郎を充てます。大正10（1921）年、小松鉄工所は竹内鉱業から分離独立し、株式会社小松製作所となり、同時に小松電気製鋼所を吸収合併します。そして後に「世界のコマツ」へと成長します。

明太郎は偉大な実業家でしたが、政治家としても活躍します。大正4（1915）年、衆議院議員総選挙に立憲政友会（高知県郡部区）から出馬して当選し、その後2期務めています。

数々の偉業を成し得た明太郎でしたが、晩年は炭鉱不況と昭和金融恐慌のあおりを受け、昭和3（1928）年、竹内鉱業が立ち行かなくなります。この頃から心労がたたり肺を患い病床に伏せることが多くなります。その年、病気が回復することなく、この世を去りました。享年68歳でした。主を失った竹内鉱業は廃業となりました。

明太郎は企業が巨大化することを嫌っていました。経営者と従業員が同じ価値観を持つ精鋭部隊であることを企業の理想と考えたからです。そうした経営哲学の下、鉄工部門を分社化します。その結果、竹内鉱業消滅後も唐津鐵工所と小松製作所は生き残ります。特に小松製作所は竹内鉱業が苦境に陥ってからの分社化です。そこには何があってもこの企業を守ろうとする明太郎の気持ちが伝わって来ます。そして自らは竹内鉱業という沈没船に乗って沈んでいったのです。巨万の富を築いた明太郎ですが、死に際は無一文だったといわれています。全てを失っても、そうした潔さによって国の発展を導く多くのものを残したのです。

竹内綱・明太郎を育んだ宿毛

高知県宿毛市は四国の南西部に位置し、愛媛県に接して近くには景勝地足摺岬があります。江戸時代は伊賀氏居城の城下町として栄え、明治維新後には多くの優秀な人材を輩出します。

城下に広がる市街地は縦横一辺500メートルほどで、2時間ほど歩くとまち並みの全てを見ることが出来ます。市の人口は2万人弱の小都市ですが、明治～大正時代に活躍した著名人が多く、20人を優に超えます。まちを歩くと小野梓記念公園、竹内綱・明太郎・吉田茂邸跡、日新館跡、文館跡、大江卓邸跡、酒井南嶺邸跡、後藤環爾邸跡といった史跡があり、町じゅうが資料館のようです。

著名人がこれほど多い要因はいろいろ考えられますが、まずは幕末の変革期に目付け役として力を発揮した竹内綱の指導力や教育者酒井南嶺の影響が大きいでしょう。酒井は「日新館」の講授役として教鞭をとり、その薫陶によって明治時代に多くの人が活躍します。竹内綱もその一人です。また、土佐出身の吉田東洋門下生で維新後も活躍した後藤象二郎、板垣退助、岩崎弥太郎との交わりや、土佐勤王党の坂本龍馬、中岡慎太郎、武市半平太、岡田以蔵など、明治維新で活躍した人たちの気概が、土佐の西端である宿毛にも伝播したと考えられます。

高知県宿毛市に竹内綱・明太郎親子の邸宅があった。今は案内板と石碑が残るのみ。